

消 息

ヤヌシュ・ブダ先生をお送りするにあたって

ヤヌシュ・ブダ先生は、2017年3月末をもって早稲田大学をご定年退職されます。先生のご退職にあたり、商学部教員を代表してご挨拶させていただきます。

ブダ先生は、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS：School of Oriental and African Studies）で日本語を専攻され、大学院進学後は、源実朝の『金槐和歌集』を研究されました。1972年に初来日され、一度英国に帰国された後、1976年以来、日本の大学等で教鞭をとられています。先生は、昨年10月に満70歳のお誕生日を迎えられたので、人生の半分以上を日本で過ごされてきたことになります。

先生は、商学部および大学院商学研究科で英語でのプレゼンテーション、ネゴシエーションなどの授業を担当されましたが、授業では日本語はいっさい使わず、学生にもすべて英語での発言を求められたと仄聞しております。学生達にとっては、厳しい先生であったかもしれませんが、日本に居ながらにして、英語を母語とする先生の授業を受けられたことは、学生にとっては貴重な経験であったと思います。

残念ながら、私は学部の仕事では、ブダ先生とご一緒することはほとんどありませんでした。しかし、私が大学院商学研究科の教務主任を務めた際には、入学試験の出題で大変お世話になりました。

現在大学院入試における英語は、修士課程、博士後期課程ともに、TOEIC、TOEFLなどの外部試験の得点を利用しています。しかし、2013年度入試までは、先生方が出題をされており、これらの入試において、しばしばブダ先生にご協力頂きました。

何年度の入試か記憶が不確かですが、ブダ先生が出題された英語の問題の文章に出版が記載されていなかったもので、ブダ先生に出典をお尋ねしたことがあります。すると、先生ご自身の文章であるとの返答を頂きました。その時に、「自分が今までに読んだ文章（小説、評論など）で、これだけ含蓄がある文章はそうないな」と感じたことをよく覚えています。また同時に、ブダ先生が書かれたような文章こそ、書き手の教養の豊か

さを反映していると感じ入った次第です。

また最近、英語を母語とする先生の文章について話題になった際、他学部のある先生（その先生も、名文家としての評判が高いそうですが）が、ブダ先生の英文は非常に素晴らしいとおっしゃっていたという話を耳にしました。その時、私が以前ブダ先生の文章について抱いた感想は、正しかったことを再認識しました。

ブダ先生には、入試の出題以外でも、大学院の業務上作成する文章の英語版について、たびたびチェックして頂きました。そのおかげで、大学として恥ずかしくない英文情報を学内外に発信することができました。この場を借りて、ご紹介するとともに、改めてお礼を申し上げたいと思います。

うえでご紹介したとおり、ブダ先生は日本の古典文学研究をご専門とされていますが、いわゆる ICT（情報通信技術）にも精通されているようにお見受けします。以前、何気ない会話の中で「自動翻訳」が話題になったことがあります。その時、私は「そのうちそういう技術も出現するだろうな」と思っていたところ、ブダ先生が「そういう技術は、もうあります」とおっしゃり、余計なことを口にしなくて良かったと内心冷や汗をかいたことがあります。今後ますます ICT は進歩すると予想されますが、ブダ先生にとっては、ご研究と趣味の題材が尽きないものと思います。

早稲田大学の規程では、心身ともにご健康であったとしても、満70歳になった年度末をもって、大学の教壇に立つことはできなくなっております。この規程に沿って、ブダ先生は、この3月をもって早稲田大学商学部の教壇を去られますが、研究者としての人生に定年はありません。ブダ先生のこれまでの早稲田大学とくに商学部に対するご貢献に深甚なる感謝の意を表するとともに、今後ともご健康に恵まれ、いつまでも研究に携われることを祈念して、私の送別の辞とさせていただきます。

早稲田大学商学部長
早稲田商学同攻会長
藤田 誠